

未練と八文字屋

篠 原 進

宝永七（一七一〇）年の江嶋屋開業に端を発し、其磧の内情暴露（『役者目利講』・京の巻・口上）（正徳四年）で本格化する自笑と其磧との抗争。その渦中、八文字屋側に一人の作者が登場した。その名は未練。以下、この未練について考え、抗争期の一面を知る便としたい。

一

① 去己（注・正徳三年）ノ秋、八文字や八左衛門方は、油小路五条下ル未練と申新作者にて八文字自笑とかり名仕出申候——（傍点筆者以下同じ）
 ② 八再摺本か・『忠臣蔵太平記』（巻一・見返し）・長谷川強氏御紹介——
 （返魂香の作者、つまり其磧は）去々巳ノ年（正徳三年）まで十五年が間仕候作者にて候へ共、八文字や身が成仕形在之候ニ付去午の春より此江嶋やかたへ仕遣し候ゆへ、八文字方ニは去年より素人の新作者をやとひ右年来の作者のふりを仕、世間の人様へかつけ申候——八中略——
 八文字方より出申評判本其外風流本共ニまへの作者とかはり素人の新作にて御座候——

△『役者返魂香』（正徳五年・正月）京の巻・口上▽

①②は共に其磧の入手した「素人の新作者」についての情報である。②の傍点の如く、「素人」を二度も繰り返しているところに、この作者に対する其磧の対抗意識が髣髴としている。まず注目したのは、①で新作者が「油小路五条下ル未練」であると、詳細に記していることである。信憑性は非常に高いと見てよいだろう。いずれにしろ、未練がこの時期の八文字屋に何らかの形で関与していたことは、確実である。

『曲亭漫筆』（巻二）は次の如く記す。

「或人云々。自笑、其磧とあしくなりてのちは南嶺といふ人と相

▲扱お断申上まする

③

井ニ色里の猫の皮に恐れてよりつかぬ白鼠
全部 手 代 袖 簀 簀

付リ小宿の舛落しを遁れて夜あるきせぬ内鼠

井ニ勘当の身に業平の冥世帯ハ手煎の鍋取後家

女男伊勢風流 全部六卷

付リ頼まれてひかぬ気の有常が娘ハ勸奉公にあづ

井ニ笹ハラをかけらぬ疵を持た足屋の藤永

全部 分 里 艶 行 脚

付リ色狂ひの常世ハ梅桜松を手生の大尽

右三色共ニ近日本出申ゆへ此所ニ書しるし候

—— 岩瀬文庫蔵『西海太平記』(巻一・見返し) ——

談して著作せしと」

しかし、中村幸彦氏の指摘がある如く、正徳当時、一六歳という南嶺を未練に擬するには、聊か無理があるのである。となると、ここで未練という人物について考察しておくことが、一層重要となってくる。

ところで、①と②の記述には微妙な差がある。それは、雇用時期の問題である。まず、①は「正徳三年秋」。これに対して②は「去年」、つまり、正徳四年とするのである。どちらが正しいのであろうか。

この問題に明快な答えを与えてくれる資料が、岩瀬文庫から出て来た。井上和雄氏『慶長以来書買集覧』(六〇頁)で存在が指摘されていながらも、所在が明らかでなかった、中嶋又兵衛版の『西海太平記』である。それは「正徳三年九月」という刊記を有し、巻一の見返しに上の如き予告を載せるのである。

この予告の示唆するものは多いが、とりあえず三点ほど注目しておきたい。

まず、『女男伊勢風流』の執筆契約がこの正徳三年九月という時期に、「六巻」として成されていること。勿論、この構想は、翌年正月の刊行時には三巻となり、後半の三巻は『愛敬昔色好』として三月に出されることとなる。しかし、いずれにしろこの時期に自笑は、其磧に代る新作者の手配を完了させているのである。これで、先掲①の記述の方が正しいことが証明された。

このことに関して、少し触れておきたいことがある。つまり、多少の悶着はあったとしても、自笑と其磧の関係は、正徳三年の四月迄何とか続いていた。そのことは其磧も言っている(先掲②の資料)し、その年の四月に出た『役者座振舞』に其磧の筆致が認められることからも裏付けられる。となると、自笑は其磧の原稿を確保する一方で、新作者を探していたことになる。その結果が、先掲③の広告として公けにされたのである。この広告を其磧は、どんな気持ちで読んだのであろうか。彼としては、中心作家として八文字屋に隆盛を齎したという自負が

ある(『役者目利講』・口上)。それが、この半丁分の広告でいとも簡単に崩れてしまったのである。彼の怒りが三ヶ月後の『役者目利講』で噴出するまで、自笑との間で水面下の激しいやり取りがあったことを想像するに難くない。その証として、『女男伊勢風流』の序を挙げよう。自笑はそこで其碩を「物むつかしき人」と呼び、「世に喧嘩の中買あらば。己は道をよけてあらそふ事をまぬかれ」と言って、応酬を避けているのである。『目利講』が『伊勢風流』にどれだけ先行するのか知らない。役者評判記が実際の刊記よりも、どの程度早く出される習慣があるのかも、私は知らない。しかし、少なくとも同年月の刊記を有する両書にあって、後者が前者の暴露を読み、慌てて避難したとするなら、あまりにも手際が良過ぎるのである。ここは、やはり先述の如く推測しておく方が自然なのではないだろうか。つまり、③の広告が両者確執の契機となり、続く三ヶ月が抗争の前段階であったということである。

二つ目は、『手代袖箒盤』よりも、『西海太平記』の方が先行するということである。このことは、一見どうでも良いことのように思われる。しかし、未練の著作を考える際には、看過出来ない問題を孕んでいる。この点に関しては後述する(二九頁・第三節冒頭)。三つ目は、この広告を掲載した版元の中嶋又兵衛と八文字屋との関係である。両書肆は如何なる繋りを持っていたのであろうか。迂路を採るようであるが、少し考えておこう。

二

正徳二年から享保三年迄の両書肆の出版状況を表にしてみた(二六頁④参照)。

まず注目したいのは、正徳三年の部分である。丸で囲んだ如く、その年に中嶋から出た浮世草子四作品の総てが八文字屋と重なっている。残念ながら、中嶋又兵衛について語れるほどの資料を準備していない。今、分っていることは、正徳三年「寺町通松原上ル町」に忽然と現われ、この年に『今川一睡記』以下四編の浮世草子を一挙に上梓したということくらいである。

新書肆が九ヶ月という短い間に、多くの本が出版できた裏に、八文字屋の存在があった。こう考えるのは正しいと思う。問題は両書肆の絡ませ方である。例えば、中村幸彦氏は両者の関係を考えるにあたって、この年の四作品を二つに分けている^六。

| 年号④ 書肆 | 八文字屋八左衛門版(浮世草子) | (役者評判記) | 中嶋又兵衛版 |
|-------------------------|--|---|--|
| 正徳二年 (1712) | ▲『名物焼蛤』▽ ▲『當流曾我高名松』▽ ※ 刊年不明 1 『頼朝三代鎌倉記』(五卷) (長谷川強氏『浮世草子年表』に拠る) | 3 『役者箱傳受』(三) | |
| 三年 (1713) | ① 『今川一睡記』(五) (『浮世草子名作集』に拠る) ② 『百性盛衰記』(四) (『江戸時代文藝資料』(三)に翻刻) ⑤ 『當世信玄記』(五) (『浮世草子年表』に拠る) ⑨ 『西海太平記』(五) (『浮世草子年表』に拠る) 9 『手代袖笄盤』(五) | 4 『役者座振舞』(三) | ① 『今川一睡記』(五) ② 『百性盛衰記』(四) ⑤ 『當世信玄記』(五) ⑨ 『西海太平記』(五) |
| 四年 (1714) | 1 『女男伊勢風流』(三) 前編 (自笑名の序有) 3 『愛敬春色好』(三) 後編 (冬) 『京略ひながた』(三) | 2 『役者色糸図』(三) | ⑨ 『都ひながた』(三) |
| 五年 (1715) | 1 『風流詠平家』(五) 前編 (自笑名の序有) 4 『義経風流鑑』(五) 後編 (自笑名の序有) | 1 『役者懷世帯』(三) | 11 か 『万宝千年松』(絵入狂言本) |
| 享保元年 (正徳六) (1716) | 1 『分里體行脚』(五) (自笑名の序有) | 1 『役者願紐解』(三) 4 『芝居晴小袖』(三) | 6 『曾我鎌倉飛脚』(五) (風瓢子の序がある) 9 『庭訓染匂車』(五) (松代柳枝の序がある) |
| 二年 (1717) | 1 『風俗傾性野群談』(五) (自笑名の序有) | 4 1 『役者色茶湯』(三) 『野傾髪透油』(三) (懷中洗濯の板木利用) | 『けいせい折居鶴』(五) |
| 三年 (1718) | 11 『傾城電照君』(五) ※ (他に大坂綿屋喜兵衛版がある) 3 『野傾咲分色存』(五) (自笑名の序有) ※ (『艶行脚』巻末に、本書への導入有) | 1 『役者三幅対』(三) | |

◇凡例

- ・役者評判記は、『歌舞伎評判記集成』(巻五・同六)(信波書店)を参照した。
- ・両版のあるものは、刊行の月を○で囲んだ。
- ・其碩が自作と明かしたもの(『目利講』・口上)は除いた。
- ・刊記や、書肆名を原本で確認してないものは、(一)の中に根拠となった先考を示した。

④ 八文字屋の所有していた其稿の原稿↓『今川一睡記』・『百性盛衰記』

⑤ 中嶋の所有する作者X(単数)の原稿↓『當世信玄記』・『西海太平記』

そして、その理由として、④は「自店から発兌すれば、何か其稿から攻撃をうける原因があつて」中嶋から発売させた。また、⑤はその見返りとして八文字屋が印刷した、とするのである。つまり、八文字屋は自店のダミー(別会社)として、中嶋との提携関係を持ったという解釈である。

長谷川強氏は別の解釈をとる。すなわち氏は、この中に「自笑の作があつたのではないか」と述べた後、「三年における八文字屋の中嶋への接近は、有能な代作者獲得の為の工作であつたかと思はれる」と結論して、ダミー説を否定するのである。

自笑の作品があつたかどうかは別として、私の考えも長谷川氏に近い。後述する如く、未練が中嶋の周辺にいた人物であることは確かだからである。ただ、原本を対照した際、聊か気になる事象が出てきたので、ここではとりあえず、第三の立場で仮説を述べてみることにする。

私の言う事象とは、『當世信玄記』の刊記のことである。つまり、中村幸彦氏御指摘の如く、八文字屋刊の『役者座振舞』(正徳三年四月・江戸の巻・見返し)には、「卯月十七日」より出すという本書の予告が載る。しかし、管見によれば「正徳三年四月」という刊記を持つ八文字屋版は無い。例えば、早稲田大学図書館所蔵の『當世信玄記』の刊記は次の如くある。「正徳三年巳ノ五月吉日 中嶋又兵衛板」(傍点筆者)。勿論、現存しないことが、出版されなかったということの意味するわけではない。日付まで記しているのは気になるとしても、予告より延引することは度々あることなのである。ただ、私が注目したいのは、岩瀬文庫所蔵本の刊記である。そこには、「正徳三年巳ノ七月吉日 板」(傍点筆者)とあり、月が改められ、版元部分が削除されているのである。ここで版元名を削り、二ヶ月遅れで本を出したのは誰なのであろうか。

他の作品に目を移すと、似たような例が『西海太平記』の刊記にも見られる。資料③に示した如く、岩瀬文庫所蔵のものには「正徳三年巳ノ九月吉日中嶋又兵衛新板」とある。これに対して、国会図書館所蔵の本は、他は全く同じで、版元の部分のみ削つてあるのである。両者が同じ板木であることは、マイクロフィルムを重ね合わせてみれば明白である。

以上の事例から引き出した私の仮説は、こうである。つまり、八文字屋は中嶋の出した『當世信玄記』及び『西海太平記』の二書を、版元

名を削った形で自店から売りに出したのではなかったろうか。中嶋はダミーではなかったし、勿論両者は相版の関係でもなかった。付き合いは、作者と作品とを持つ中嶋に、資金力や秀れた印刷技術を持つ八文字屋が接近するという形ではじまり、両者はあくまで独立した関係にあったのではなかったかと思うのである。

また、中村幸彦氏は『今川一睡記』の印刷が、「八文字屋の印刷なること後年の目録で明らか」としているが、或いは印刷スタッフの貸与まであったかも知れない。そして、八文字屋はこの援助の見返りとして、中嶋の本が出ると同時に板木を譲り受けたのではないだろうか。『百性盛衰記』については、両版を付き合わせていないので何とも言えないが、『當世信玄記』（再摺本）の刊記が二ヶ月遅れになっていることの意味は大きい。今仮りに、八文字屋が板木の譲渡を受けると同時に、自店の名で版元名を埋めて『百性盛衰記』を出したとしよう。当然、中嶋から抗議が出る。何故なら、「八文字屋と、名を取申上なれば。たとへば烏が母と書て板行仕出シ候ても、八文字屋と申名にて、賣」(『役者目利講』・口上)れるのであるから、競争となれば中嶋に甚だ分が悪いのである。そこで出された妥協案が、『當世信玄記』など、以後の作品は二ヶ月遅れで出すことや、八文字屋の名を刻まないことだったのではなかったろうか。

勿論、私の仮説は中嶋と同じ刊記を有する八文字屋版の『當世信玄記』や『西海太平記』が出現することで崩れる脆さがある。しかし、全

くの思いつきで述べているわけではないのである。もう一つ傍証を示そう(上記⑤参照)。

正徳五年正月に八文字屋から出された『役者懷世帯』に付せられた広告である。この『京略ひながた』は、現在の『都ひな形』と同一本である。

なぜなら、三巻の各題が『都ひな形』のそれと全く一致し、「小式部」や「若菜」といった登場人物が符合するからである。また、題の下に「十二段」とあるが、『都ひな形』も「十二段」の△やつし▽となっているのである。ところで、東京大学霞亭文庫所蔵の『都ひな形』は、次の如き刊記を有している。「正徳四年午ノ九月吉日中嶋新板」。つまり、これも中嶋版

▲去冬より出し置候本此所ニ書印申候

夫婦 雙の岡 全部三巻

(以下三行略す) 右は大和繪師西川筆ニ而さいしき繪也

并ニ金賣吉次が栄花も忽替り狂言の番付

京略ひながた 十二 三巻

付り身うけの姫を下屋敷ニ置火燵のやぐら太鼓

第一 敷疊百八十疊此内五十四帖は小式部が作

第二 金山に蜜夫の蔓此はくに根の有ル若菜

第三 鶴 羽の矢矧。宿此段は一中ぶしの上るり姫

△正徳五年正月刊『役者懷世帯』(大坂の巻・表紙見返し)▽

なのである。そこで気になるのは、⑤に「去冬」より出したとあることである。いくら現在の暦と違うとはいえ、九月を冬と記すであろうか。勿論、既刊広告であるから出されたことは確かであり、「八文字屋蔵板目録」にも載っている。^{一三}となると、前年のケースと同じように、中嶋の上梓と同時に板木の譲渡を受けた八文字屋が、ここでも二ヶ月後の冬、つまり十一月頃にこの本を出したと考えるのも良いのではないだろうか。

とりあえず、ここまでの推論を整理しておこう。正徳二年の冬、有力作を保有する中嶋が、新書肆を開き、これを上梓したい旨、先行の八文字屋に相談する。持参の原稿を読んで、自笑は出版人^{エディター}の勘から行けそうだと感知した。しかし、彼にとって目下の関心事は、自店の作品を確保していくことである。頼みの其碩は、江嶋屋にかかりつきりで、その年は、掌編(『情ひいな形』の文章部分と、『役者箱伝受』の序)しか書いてくれない。そこで自笑は、資金の援助や印刷に協力することなどを条件として、中嶋にその方面の手当てを依頼する。具体的には板木の譲渡と、代作者を紹介して貰うことであった。条件は受け入れられ、八文字屋は『今川一睡記』を中嶋版の第一作として刷り上げるのである。以下の経緯は前に述べた通りである。

三

さて、正徳三年の夏ころ(③の資料に拠って取り敢えずこう考えておく)、中嶋は自笑の依頼に応じ、新作者として未練を紹介する。早速執筆の約束ができ、その構想が九月に先掲③の予告として出るのである。

それでは、八文字屋に於ける未練の第一作は何であろうか。先掲①の資料に拠れば、正徳三年秋からその執筆をはじめ、自笑の名で出したという。となると『手代袖算盤』ということになる。しかし、この作品には「正徳三年九月」という刊記がある。確かに「近日」(③の資料)ではあるが、聊か早い気もする。

ともかく、以下未練の関与した可能性のある作品を総て示してみよう。そして、それらの手法・内容及び従来の説などを検討することで彼の活動範囲を推測し、作品の認知を試みたい。

| ⑥ 書名 | 手 法・内 容 | 作 者 |
|---------------|--|--|
| (1) 『名物焼蛤』 | ・野村増右衛門事件を扱った際物長編。 | 中村氏 (H)M 水谷不倒氏『列伝体小説史前編』 (H)長谷川強氏『浮世草子の研究』 |
| (2) 『當流曾我高名松』 | ・長編時代物。曾我後日譚。鬼王・団三郎が畠山家に仕え、五郎丸を討つ。 | ・自笑 (日本小説書目年表) |
| (3) 『頼朝三代鎌倉記』 | ・長編時代物。酒色に耽る頼朝の下での善悪の家来対立を夢仕立てで描く。 | ・自笑 (日本小説書目年表) |
| (4) 『今川一睡記』 | ・長編時代物。赤穂浪士劇を足利時代に移し、師直の悪と討たれるまでを今川孝宗の夢仕立てで描く。 | 其蹟か ・自笑 (日本小説書目年表) |
| (5) 『百姓盛衰記』 | ・長編時代物。世嗣ぎ(大之助)の廓通いなどをめぐっての御家騒動。百姓の一揆(廓銀を調達するための圧政で)が絡む。 | 其蹟か ・其蹟(M) |
| (6) 『當世信玄記』 | ・長編時代物。曾我五郎の生れかわりの武田晴信が、世継ぎをめぐつての御家騒動に巻きこまれる。 | (7)に同じ ・落月堂操庵(日本小説書目年表) |
| (7) 『西海太平記』 | ・長編時代物。赤穂浪士外伝。大岸宮内の同心である高岡の妻が船頭に殺されるが、その娘が苦勞の末に敵討ちをする。 | (6)に同じ ・未練の習作か(H) |
| (8) 『手代袖簀盤』 | ・長編町人物。おのころ屋島右衛門に仕える、門兵衛善助という善悪二人の手代の対決を描く。 | 不 明 ・自笑(享保書籍目録) |
| (9) 『女男伊勢風流』 | ・長編好色遊里遍歴物。業平が諸国の遊里をめぐる。これに小野小町など六歌仙が絡む。謡曲や(業平や小町関係のもの)西鶴の文利用が目立つ。 | ◎ ◎ ・自笑(M) ・未練(H) |
| (10) 『愛敬片色好』 | | ◎ ◎ ・自笑(M) ・未練(H) |
| (11) 『都ひな形』 | ・「仕組みのおもむきをつより追せて」(序)とあり『十二段』の世界を歌舞伎仕立てで語る。長田父子を敵とする義経外伝。 | ・未練(H) |
| (12) 『風流訛平家』 | ・長編時代物。義経等についての俗説を集め「むとうなすく斗をあつめ。新義経記」(風流鑑・序)としたといい、俗解が多い。章のはじ | ◎ ・自笑(M) 未練(H) |

| | | |
|----------------|---|---|
| (13) 『義経風流鑑』 | めに教訓的言辭が頻出している。 | ◎ 自笑(M) ・ 未練(H) ・ 其磧(享保書籍目録) |
| (14) 『分里艶行脚』 | 。遊里遍歴物。代夢の法師が、つね、という遣手に、嶋原の味噌部屋に押し込まれてから、富士の人穴を経て神奈川へ出るまで諸国の遊里をめぐる。『色付』を予告。 | ※全編を系列に・BAのよいもけ、出来分の(B)が新作者。西鶴の影は他作(A)は作者 |
| (15) 『曾我鎌倉飛脚』 | 。長編時代物。曾我物語に対する新解釈。祐経は義の人で諸国行脚。八幡が祐経を名乗り悪を成す。 | ○ 上に同じであるが住所に疑問(H) |
| (16) 『庭訓染匂車』 | 。教訓小説。殺生・偷盗・邪淫・妄語・飲酒を並べその五戒を題材とした小説を配す。 | ○ 右に同じ(H) |
| (17) 『風俗傾性野群談』 | 。遊里遍歴物。『国性爺合戦』にならない和東内(富商)が遊里をめぐるといった△やつし▽が展開されている。 | ○ 自笑(M) ・ (14)でいう(A)の作者か(H) |
| (18) 『けいせい折居鶴』 | 。由井正雪一件を遊里仕立てで語る。廓の教化に失敗したお雪は紙折の鶴に乗って逃げる。 | ・ 改題本『手管三味線』に「海音」の名がある(日本文学大辞典)。 |
| (19) 『野傾咲分色幀』 | 。遊里遍歴物(野傾物)。幼いころ、さらわれて遊女・若衆となった双子を通しての諸国の遊び場紹介。 | ・ 自笑(M) |
| (20) 『傾城鑑照君』 | 。茨木屋斎齋の事件を扱った際物。浄瑠璃や説経(『さんせう太夫』)を巧みに利用している。 | ・ 自笑(M) |

◇凡例

・ 中村幸彦氏「自笑其磧確執時代」で示された、作者の推定を示した。――◎――未練の可能性の高いもの

・ 氏は、風瓢子(見蓮)・松代柳枝を同一人物と推測している。――○――未練と考えられるもの

※は中村幸彦氏が『八文字屋本集と研究』(解題)で示された解釈。但し、若干の修正が必要。

例えば、氏がBとした巻三の四は、『懐視』(巻三の四)を使っており、Aとすべき。また、「西鶴の影響」というより、「利用」「逆用」とした方がこの場合相応しい。

この問題を考えるにあたっての最大の難点は、考察の核となるべきもの、つまり、確実に未練のものと断定できる作品が無いことである。それゆえ、従来の研究は代作者の存在を気には掛けても、細部の検討にまでは至らず、序の署名を唯一の根拠として、抗争期に八文字屋から出た作品を自笑作と認定していたのであった。しかし、先掲の如き研究（註六や一の書）が中村幸彦氏や長谷川強氏によって出されると状況は一変する。先鞭をつけたのは、中村氏であった。

氏はまず、未練の作とみて間違いないものとして、(9)(10)(12)(13)の二種四作品を選定する。そして、特に後者(12)(13)からその作風を次の四つに帰納するのである（『近世小説史の研究』・一一四頁）。

〔1〕 当時の小説としては高い教養度の古文獻の知識を用ひ、しかもある程度、悉知のものとして説明なしに用ひてあること。

〔2〕 作中の古来著名な人物なり事件なりが、常識とは全く違った出方で、筋が展開して結末に於いて常識通説の如くなったのは、実はかゝる次第によると解釈を加へること。

〔3〕 無秩序の如く、奇想な事件を唐突な場所に点出して、最後にそれにしめくゝりをつけてゆくこと。

〔4〕 其蹟などに比し、和漢の正式な学問を持った人に見えて、猥雑な表現の中にも、本格的な文章や技巧を用ひてあること。

また、別の稿では(14)の一部にもこの作者のものが混ずるとして、そこに「浮世草子では珍しい、神道仏教など思想上の用語や古典の智識を術学的に使用^{一四}」しているとして、五つ目の特質を付加するのである。

以上の尺度を他の作品に適用させ、氏の導いた結論は、右の五作品の他に(15)(16)(17)が未練の作と考えられるということであった。また更に氏は考証を進め、『享保書籍目録』が(15)と(16)の作者をともに「見蓮」とするところから、(15)の風瓢子と(16)の松代柳枝は未練と同一人物でないかと推定しているのである。^{一五} また、明快で見事な手際と言えるだろう。しかし、その明快さ故、気になる部分が残る。例えば、長谷川強氏も指摘する如く、(16)の書は「浪花太代柳枝」（傍点筆者）としている。これは①の資料で示した未練の住所（油小路五条下ル）と抵触するのである。また、二つ目はこの柳枝が『好色人子枕』（正徳二年二月）の作者「浪花鼠鬚士柳枝」と同一人物か否かということ。^{一七} 三つ目は、自笑が『武徳鎌倉旧記』（享保三年）の作者馬場信意をその序で「柳陰子」と呼んでいることである。柳枝と柳陰子、語呂が似ているだけに気になるところである。そして、四つ目が根本的な問題なのであるが、作風という観点という点で限界があるということである。なるほど、中村氏の論には、十分な説得力がある。しかし、先に氏が五項目に分け、未練の作風としたものが、彼の作として挙げられた(9)(10)(12)(13)(15)(16)(17)

そして④の一部といった総てにあてはまるだろうか。また、例えば、どの程度を以て衡学的とするのか、読む者によって評価が分れるということとは否定できないと思う。

四

さて、ここ迄私は先考を批判することに終始してしまつたようである。結論を急ぐことは禁物であるが、以下未練の作品について私なりの仮説を示すことにする。それが礼儀だと思ふからである。

方法は二つある。一つは作風から迫る方法。勿論、先述の如くこの方法には客観性という点で限界はある。他の一つは、用字・用語・常套句などから推測していく方法である。この方法は極めて有効なのであるが、欠点はサンプルの収集が難しいことである。実際、私の場合、収集したカードに未整理の部分が残っていることもあつて、ここ迄これといった決め手を見出しかねている。とにかく、ここでは前者の方法に、後者を援用していく形で考察を試みようと思う。

私が核として選んだのは、『女男伊勢風流』及び、『愛敬昔色好』である。勿論、未練のものと断定することに不安はある。しかし、先掲③の広告のこともあるし、先掲①②の資料間の矛盾も、①を契約の時期、②を出版された時期と考えれば説明がつかないこともない。また、時期的にみても妥当な選択だと思ふからである。

度々引用して恐縮なのであるが、この二書についても中村幸彦氏の明快な説明がある。^{一八}

『一代男』の諸国遊里巡りを業平の身上に移し、『御前義経記』風のやつしを、『伊勢物語』六歌仙の世界に展開した。
まず、坂田藤十郎「紙子伝授」の逸話^{一九}を踏まえて、大枠はこう設定されている。

去る女大尽が京で遊山の折、文紙子を着した男を見かける。跡を追うと男は業平と名乗り、「向後色神となつて無得心なる恋しらずに取付。色事もっはらに行ふへし」と言つて、女大尽に着ていた紙子を授けるのである。そこには「いせ物がたりにのりし好色」が、「手に取てみるごとく」記してあつた。つまり、これが色道の手本で「心をとめてよむときは色道の悟道に至る」というのである。以下、その文の紹介とい

う形で巻一の二以降の話へと導入されることになる。

其蹟作といわれる『風流色圖法師』(正徳五年)と、よく似た発端であるが、内容は色道の指南という枠に囚われないユニークなものとなっている。その一端を示してみよう。

○井筒や二条の后など御馴染みの女性の外に、若紫や小野小町・松風・村雨達を登場させ、業平に(後の二人は行平に)絡ませる。

○一方、業平を慕う小町には、深草少将や文屋康秀らが絡み、大伴黒主は小町を遊里に欺し売る悪役として、暗躍する。

○業平は江戸で小町比丘尼(小野小町と別人)と世帯を持つが、すぐに別れ、都鳥大臣(源の至)に同道して、諸国の遊里巡りを続ける。

○その途中、真雅僧都や馬追い姿に身をやつした壬生忠見と会う。忠見を伴っての帰路、融大臣の遊興に付き合う。

○黒主の懺悔もあり、業平の勘当が解かれる。

以上の断片でも、複雑に入り組んだ構成の様子が分ると思う。つまり、業平の遊里巡りという一筋の糸に、彼に関しての逸話を付着させ、作者は登場人物をマリオネットの如く縦横に操るのである。勿論、『伊勢』はあくまで大枠であって、時にはそれを逸脱して、王朝時代にゆかりのある人物の点出もする。その際は、時代違いにも拘泥しない。この手法をとりあえず、古典の俗訳・俗解、言わば、

〔一〕 \wedge や \vee の方法と考えておこう。

他に目立つ特徴として次の七点を加えることができる。

〔二〕 謡曲を踏まえたものが多い。

〔三〕 古歌や故事などを、読者悉知のものとして出すこと。

〔四〕 洒落の多用。

〔五〕 歌舞伎の名場面を \wedge 見立て \vee たり、音曲や大道芸に言及すること。

〔六〕 風俗描写、特に着物の種類や柄などを詳述すること。

〔七〕 色道や遊里に関しての知識を披瀝することが多い。

〔八〕 構成が甘い。

まず、「二」の具体例から示していこう。

○(巻一の五から巻二の二)業平は身請けした若紫を高安に置き、そこへ通う。ある時、彼はそこから井筒のもとへ帰ろうとする道で盗賊に遭う。その名は、沖津春之丞と白浪秋之助。老母が業平を慕っているの、一夜の情をと乞う。行くと老婆は二条の後で、これを連れて逃げる。業平が駕籠屋にチップをやる際、「かの女中其銀をみてそれは白玉か何になる物ぞと問たまふ」。しかし、結局は連れ戻され、老婆の正体を知った業平は「銀しろしめさざりしも道理。しら玉か何ぞと人のいし時露とこたへてきへなまし物をと。足ずりして」泣くのである。

◇業平の河内通い。◇「沖津白波」の歌の縁で盗賊の登場(以上『伊勢』二三段)。◇業平が老婆と合う(同・六三段)。◇二条后を背負って逃げる。◇「白玉か」の歌。◇后を連れ戻される(以上・六段)。

衆知の逸話を巧妙に当世化している様子が分るであろう。なるほど、『伊勢』の当世化という技法は別段目新しいものではない。近世のみに限っても、全体を逐語的に△やつし▽た『仁勢物語』があり、砕けたところでは△部分やつし▽の『好色伊勢物語』や『真実伊勢物語』などが出ている。また、衆知の如く西鶴も『好色一代男』で、『伊勢』の△やつし▽を試みていた(巻四の二など)。しかし、根本的に違っている部分がある。それを山藤章二氏流に表現するなら、「読者にもある程度のレベルを要求する」ということになる。つまり、この作品は読者に対して、幾許かの予備知識と深読みとを求めているということであり、読者には知的レディネスが不可欠なのである。勿論、知的傾向と街学的傾向とは紙一重であるが、とりあえず知的△やつし▽ということを特徴として挙げておく。この傾向は、

「二」謡曲を踏まえる、といった姿勢にも顕著である。利用された謡曲を思いつくまま挙げてみよう。

◇『伊勢風流』・(一の二)『井筒』・(一の三)『小鹽』・(一の四)『井筒』・(一の五)『同』『卒塔婆小町』・(二の二)『山姥』・(二の二)『松風』・(二の三)『草子洗小町』『西王母』・(二の四)『草子洗小町』『鸚鵡小町』『通小町』・(二の五)『難波』・(三の二)『徒然草』第九段・(三の二)『草子洗小町』・(三の三)『杜若』・(三の四)『同』・(三の五)『富士山』

◇『愛敬昔色好』・(上の二)『盛久』・(上の二)『通小町』『小鹽』・(上の三)『隅田川』・(上の五)『鉢の木』『阿古屋松』・(中の二)『八島』『班女』『木賊』『蘆刈』・『紅葉狩』・(中の三)『仏原』『田村』・(中の四)『反魂香』・(中の五)『歌占』・(下の二)『求塚』『三井寺』『通小』

町』・(下の二)『融』『卒塔婆小町』『鸚鵡小町』『野守』・(下の三)『融』『関寺小町』・(下の五)『小鹽』『関寺小町』『志賀』。(なお、以下「卷一・二・三」は『伊勢風流』、「上・中・下」とあれば『愛敬昔色好』の各巻を指すこととする)。

以上、見落しや疑問の残るものもあるかと思うが、大勢の把握に影響はないと思う。業平や小町に関係する謡曲は勿論、『紅葉狩』や『三井寺』など、舞台や状況に応じて数多くのものが動員されているのである。

また、注目したいのは、それら背景となる謡曲を読者が既知っているものとして使用していることである。例えば、『八嶋』の詞章に「朝倉や木の丸殿にあらばこそ名のりをしても行かまし」とある。これを踏まえて、業平に名を問われた馬子(壬生忠見)は、こう答えるのである。「木の丸殿にあらねば名乗て益なし」(中の二)と。また、大伴黒主は『草子洗小町』の中で、「花の蔭行く山賤の」と詠じている。これが彼を評する際、早速次の如く踏まえられることになるのである。「かゝる候なる黒主。哥よみのうちへ入とは。しつかい花の陰に休む山がつじやともつはら世間のとりさた」(卷三の二)(以上傍点筆者)と。

勿論、謡曲の多用というこの点でも、本作品は『一代男』と似る。また、西鶴との関連でいえば、『胸算用』からの剽窃^{二三}もある。しかし、西鶴に学びながらも、右の如き姿勢にはやはり差があるような気がする。西鶴に言及する余裕はないので、本作品に限定して、もう少し考察を進めていくことにする。

古歌や故事を掲出する際にも似たような傾向が見られる。つまり、

〔三〕それら古歌や故事を読者悉知のものとして扱っているのである。例えば、『古今集』(仮名序)は次の如く扱われる。

○ 猛き武士^{ものぶ}の心をやわらげ。鬼神^{おに}の様なやり手に哀とおもはする。金といふ端利^{はなまり}(卷二の三)。

○ 文屋の康秀といふ商人よき絹を着たるやうに哥をよむくせのもの(同)。

古歌はこうもじられる。

○ 名にしをはぐいざこととはん都鳥。内証に銀のありやなしやと(上の三)。

漢詩調で戯文も作る。

○ 傾国金朽^{くち}て師^しも空しく去^さ。太鼓欲深うして客おとろかず(卷一の四)。

○旅館燈^{ともしび}幽にして鶏明曉をもよほし。罪もむくゐもおもはず旅の道すがらほどおもしろき物はなし（巻三の四）。雅文もある。

○まゆは桂の月のてり霞の柳になびく風。目もとは秋の野べになく。むしる命の露ほども。おしみませぬぞおしみやせぬ（巻三の三）。とりあえず、「二」から「三」までを総合して、教養主義的な傾向と見ておこう。

五

これに対して「四」から「七」までの特徴は、正反対である。巷の風俗や色里・大衆芸能などへの言及があり、洒落を多用して読者に迎合する姿勢が見られるのである。

「四」洒落で目立つのは地口である。

○大分の借金ありつね（有常）（巻一の二）

○殿上にて御元服在（有）原の中將業平（巻一の三）

○罪業（在五）中將業平（巻二の一）

○間もなく身代を畳屋町（巻二の五）

○ふかき恋あり（有）わらのなり平（巻三の三）

思いつくまま挙げてみても、右の如くである。

勿論、「腹の立田山」（巻一の五）や「世話を杜若」（巻三の四）の如く、目録題にこれが頻出することは言うまでもない。

「五」歌舞伎の八見立ては、忠見のやつし（中の三）や、自分のために井筒や若紫が遊女奉公をしているとは知らない業平が、彼女達を「夫の顔よこしいき畜生犬めく」と踏む場面（巻二の五）などにある。しかし、最も目立つのは、（中の四）である。そこで、業平は春風から二条后に託されたという黒髪を受けとる。それは、「薄紅梅の衣」に黒髪で「泪」という字を縫いつけ、慕情と恨みとを告げたものであつ

た。彼は「忽駄なし」と、それを火鉢に飛び入れる。すると、一面の煙。一座の者は、「是は怨霊の出ねばならぬ場じやが」と待つが、出ないので火鉢を見ると、内義が間夫へ合力するため隠した小判がそこにあるのである。結末には激しい落差があるが、それまでの過程は演劇で言う△怨霊事▽の常套を踏まえていることが明らかであろう。任意の歌舞伎、例えば『傾城浅間嶽』などをここに重ねてみても良いと思う。また、**音曲や大道芸などについての精通ぶり**は、こういった表現にも伺われる。

○川より東の繁盛廿年来耳をおどろかす。川原哥舞妓の藝子に打こんで（下の四）。

○岸の次郎三が下ばかまも気がつまり。豆の治兵衛が耳のうごくもおかしからず（同）。

○哥念仏とのゝめく。編笠きて林清がまねは正しく壬生の忠見入道。とうざい／＼のぞきのからくり。的射さしやませといへば。うなぎのかばやき。花火せんかう／＼とありあるく。哥ざいもんの弊もかれて（同）。（なお、本章には四条河原の繁盛ぶりを描いた挿絵が付されているが、これは『撰陽奇観』に転載されている。）

次に目立つのは、

〔六〕**当世風俗、衣装などを執拗に活写する姿勢**、である
例が多いので、二、三示すにとどめる。

○十八九の女二人兄弟と見へて。下には白むく緋むく。中には浅ぎの疋田。上にいちご織のかいどり（巻一の三）。

○廿一二より四五までの女。りんずに素縫。黄八丈にすみ絵。鼠がいきの両めん。ひぢりめんのふたの木がらしにつれて白きふとも（同）。

○下女が風俗町方にあらず。打出しの紅がのこ藤の棚に野田といふ字。白落の細の手にうら千鳥。玉子色の後帯をかるたむすびにして。

髪付は府中の籠細工かとうたがはれ。前髪高く立て額を取上（巻二の三）。

○京染の浅きもめんを上引はり。袖のをくはもへたつ紅うらのひかりに名の木くゆらし。佐内町八貫町への道中あれ／＼藤鼠のひとつへ物着たるは。名高き源九郎びくに（上の二）。

また、冒頭に設定された枠から考えるなら、当然のことでもあるが、

〔七〕**遊里や色道に関する言辞の多さ**が目立っている。そのことは著者のこの方面への精通ぶりを感じさせる。

○女郎の一座もはじめの程は。銀出しなからよねの御意に入たがり。酒のつめひらき床の味。粹と見られたがるは十人が九人。やぼに成てあそぶは中功者（巻一の五）。

○愚癡とはやぼの元手。それともまれて粹となる。提婆が悪性もすいより起る。姫の手管は文珠のちゑ。悪といふはまぶぐるひ（下の二）。また、諸国の色里を紹介する際の姿勢として特徴的なのは、幽きしりをしたり、「ぐはり／＼」と氷砂糖を囓る田舎女郎を挙げ、痛烈に批判している（中の四）ことである。つまり、そうすることで、次の如く三都の色遊びを相対的に礼讃していくのである。

○又しても申事ながら。天下の町人と生るゝは思はずも其身の徳なり。山家の奥のところに。分限者しかもおほし。城下のならひとて。我銀我物とも思われず。溜り次第箱に納。色宿の手へわたる事も。まれに湯治身の養生をねがひ。江戸上方へあそびにのぼれど。日数にかぎりあれば面白。取中を引きり（中の二）。

以上七点の特質を示した。「八」に触れる前に、とりあえずここまでのところを整理しておこう。第三節で中村幸彦氏の説いた未練の作風（五項目）を示したが、それと比較してみたい。中村氏の挙げた五項目をひとくちで言うなら、未練が教養人であり、作品にも教養主義的な傾向と、技巧家ぶりが顕在化しているということではないだろうか。私も異論はない。少なくとも、私の挙げた八項目のうちの、「一」から「三」までは合致する。しかし、問題なのは「四」から「七」までの特質である。つまり、前者とは全く対照的な反教養主義的様相を見せているのである。このことに関して、想起されるのが、都の錦の言葉である。彼は「難波の書林」の意見として次の如く記す。

「當世の仮名物は。すべて文章の艶に構はず。詞花言葉を飾らずとも。唯野鄙なる俗語を打込。（廿五ウ）一乃字も引かぬ凡夫の耳に。よく聞ゆるやうに編給へ。△中略▽兎角かな物は。西鶴流にしたため給へ」（『御前御伽』論議）。

都の錦はこれを踏まえて、西鶴を剽窃した。そして、先掲の如く『伊勢風流』（巻一の二）も同じことをした。このことは象徴的である。つまり、「一」から「三」までをこの作家（未練を擬す）が本来持っていた資質とするなら、「四」から「七」までは、当代の浮世草子作家として成功するための補整、言葉を換えるなら、読者迎合の痕跡なのである。このへんには、自笑の指導があったのかも知れない。

教養主義的色彩と読者迎合の姿勢、雅への志向と俗への興味、アカデミズムと反アカデミズム、こういった相対する二面の混淆を本作品の特質として挙げて良いのではないだろうか。

最後に、素人作家らしさの目立つ部分について触れておこう。それは、

〔八〕構成の甘さ、ということである。

この欠点は、業平を巡る女性達や、悪役の処遇に顕著である。

例えば、「さそふ水あらばゆかん」と、文屋康秀に従うことを、唐突に決める小町（下の五）。これは、まだよいとして、業平への想いが届かず自棄になり、破戒僧善祐と手に手を取って伊豆国へ消える二条后（下の二）や、（大切り）の融との宴で、思い出した如く登場する松風・村雨・井筒・若紫などの扱いは極めて安易なのである。

悪役の処遇に至っては、その傾向が著しい。△小悪▽左平次はいつの間にか舞台から消え、△大悪▽の黒主は「悪につよきは善にもつよく」（下の五）と、最終章で突然善と化し、懺悔をして、業平の勘当解除を奏上するのである。勿論、樊噲（『春雨物語』）の如き鮮烈な改悛の場を設定しろなどと、ないものねだりをするつもりはない。しかし、物足りなさが残ることは否定できない。

さて、ここまでの考察で導き出した八つの特質を、⑥の資料で掲げた、残り一八の作品に適用してみよう。残念ながら、八つの特質が総て該当する作品はない。勿論、全項目に該当しなければ未練の作品と認められないというわけではない。詳細な検討は別稿を期すとして、部分的にでも該当する作品を挙げ、展望だけでも示しておきたい。

〔一〕↓ (11)・(12)・(13)・(15) (他は未検討)。

〔二〕↓ 未検討。

〔三〕↓ (14)のB・(16) (他は未検討)。

〔四〕↓ (12)・(13)・(16) (他は未検討)。

〔五〕↓ (11)・(12)・(13)・(14)・(17)・(19)・(20) (他は未検討)。

〔六〕↓ (14)・(16)・(19) (他は未検討)。

〔七〕↓ (14)・(16)・(17)・(18)・(19)・(20) (他は未検討)。

〔八〕↓ (5)・(14)・(16)・(19) (他は未検討)。

勿論、作家的な成長というものを考えた場合「八」の場合はあまり参考にならない。また、充分確認のとれていないものを「未検討」として、結論を保留したので甚だ歯切れが悪くなってしまった。しかし、この場合拙速よりも巧遅が必要かと思う。

併せて、用字・用語・常套句などに関しても中間報告をしておこう。

○「家婦ハカ、V」とルビしているもの。↓「分里艶行脚」(巻二の二)(巻二の三)(巻三の二)(巻四の三)(巻五の四)・『曾我鎌倉飛脚』「借屋の——」(巻五の二)・『役者懷世帯』(京)「肝煎の——」「子持——」。「因みに、其磧は「人をきの鼻」『娘容気』(巻三の二)などと使うことが多い。なお『書言字考節用集』(四)は「家婦ハヲカタV」としている」。

○「尤の双紙」という軽口。↓「風流詠平家」(巻四の四)。「燕とは土氣のとれぬ男といふ義理かと尋るに前方菜といへる故事とかや、是、尤の双紙」・『役者色系図』(京)。「尤の双紙と一座うなづきしが」

以上のことを総合して、ここまでのところで、私の仮説を記せば次の如くなる。

- (ア) 中村幸彦氏が未練に関して示した仮説は、大筋に於て正しい。
- (イ) つまり、(9)(10)(13)(15)(16)(17)そして(14)のBが未練の作である可能性は強い。
- (ウ) (11)に挙げた(12)や(15)を未練の作として認めるなら、未練が『役者色系図』や『役者懷世帯』など八文字屋の評判記にも関わっているということも同時に認める必要がある。

(ニ) その点に言及している冒頭に示した②の資料は正しい。

(ホ) 手法的にみて(11)『都ひな形』など、未練の作として認めてよいものが他にもある(検討を続ける必要がある)。

(カ) ただし、『當流曾我高名松』(巻一の二)や『當世信玄記』は「工藤左衛門介、経」(巻一の二)などと表記しており、「祐経」と記す『曾我鎌倉飛脚』(巻四の三)と同一人とは考えられない。

以上で、八文字屋と未練とに関する考察をひとまず終えることとする。

ところで、私には一つ興味のある問題がある。それは、『女男伊勢風流』をはじめとする一連の作品が、当時の読者にどの程度受け入れられたか、ということである。なるほど、ここまで分析してきた如く、それらは教養主義的であり、才智が感じられた。また、当時の読者は、

「おしなべて。生物知」りなので、「柔なる中にも又ちんふんかんをくわえねは。中／＼合点しをらぬ」（『御前御伽』総論）ということも分らないわけではない。作者が各編至る所に播いた教養的・街学的仕掛けに氣付き満喫した読者もあったと思う。しかし、多くの読者に喰い足りなさを残したことは否定できないのではないだろうか。個人的な事情もあり、教養派の都の錦が文壇から去って、十余年。浮世草子界は、一風から其礎へと続く無教養派、読者に対して徹底して遜る作家たちが席巻していたのである。こうした状況を考えてみると、未練の作は、当時の読者にあまり受け入れられなかったような氣がしてくる。なるほど、未練の私的な事情もあったかも知れない。しかし、この辺にも後に八文字屋が未練と袂を分ち、再び其礎と接觸をとるようになった因が秘んでいたのではないだろうか。

勿論、だからといって私は未練の作が拙いといっているのではない。ただ、少し登場が早かったような氣がするのである。そのことに關して、『女男伊勢風流』と『愛敬昔色好』が、寛保二（一七四二）年に至って、再摺されたことは象徴的である。つまり、彼の作が本当に理解されるためには、享保という教養の時代を通過しなければならなかったのである。

註

- 一 長谷川 強氏『浮世草子の研究』（桜楓社）（三〇五頁）。
- 二 詳細は、拙稿「抗争期の其礎」（近世文芸）（34号）参照。
- 三 中村幸彦氏「多田南嶺の小説」『近世作家研究』（三一書房）（一二九頁）。
- 四 なお、国会図書館所蔵のものは、版元名を削っており、他の部分は、岩瀬文庫のものと同じ。勿論、予告はない。
- 五 註二の拙稿にも示したが、『役者座振舞』（大坂）の小説部分が、『世間子息氣質』（巻四の三）と、一部一致している。
- 六 中村幸彦氏「白笑其礎確執時代」『近世小説史の研究』（桜楓社）（一一一頁）。
- 七 註一の書（二九八頁）。
- 八 右に同じ（三〇六頁）。
- 九 註六の書（一一頁）。
- 一〇 右に同じ（一一〇頁）。
- 一一 拙稿「『都ひな形』論——「十二段」の系譜と浮世草子——」『硝子』（創刊号）参照。

※なおお学会で研究発表後、中野三敏氏から『都ひな形』の写本が某書店にある由御教示頂き、岡田哲氏を煩わせて、早速入手した。架蔵になったもの

は、上巻で、霞亭の本と同じく序の作者（版元？）名が削られている。このことも、八文字屋が「中嶋」の名を削って出版したという私の仮説を裏付けるのではないだろうか。

- 一二 「八文字屋八左衛門・蔵板目録」を付している本は多いので、どれに就いても良いが、たとえば、岩瀬文庫所蔵の『曾根崎情鶴』や『自笑楽日記』巻末に付載のものとみると、『風流形（やつし）雛形』（三冊）とある。これが該当すると思う。
- 一三 注六の書（一一四から一一五頁）。
- 一四 中村幸彦氏『八文字屋本集と研究』（未刊国文資料二）（解題）（二七四頁）。
- 一五 注六の書（一一五頁）。
- 一六 注一の書（三〇六頁）。
- 一七 『好色入子枕』は梅川忠兵衛事件を扱っていて、紀海音『傾城三度笠』との関係が問題とされているが〔石川 了氏』『好色入子枕』小考』『国語国文研究』（五四号）（昭和五〇年六月）、気になるのは、中嶋刊の『けいせい折居鶴』の改題本、『けいせい手管三味線』に海音の名があること（都立中央図書館加賀文庫本）である。このことと『野傾咲分色狂』に「段／＼付といふ笠付の點取に海音へゆかれた」（傍点筆者）という記述（巻三の一）とを併せて考えると、海音との関係が氣に掛るところである。なお、『愛敬』（中の二）にも、「笠付の点なりと引て。くらすべし」とある。
- 一八 注六の書（一一五頁）。
- 一九 宝永四年、京早雲座二の替狂言『石山寺誓湖』の際、坂田藤十郎が大和山甚左衛門に紙子を譲ったということ（『歌舞伎年表』・第一巻）。
- 二〇 所見本は、東京大学霞亭文庫所蔵の零本。乱丁がある〔拙稿「浮世草子解題Ⅰ『風流色圖法師』」（弘前学院大学近世文学研究会「会報」）（第一号）参照〕。
- 二一 『山藤章二のブラックアングル』「あとがきにかえて——アングルのきまるまで——」（朝日新聞社）（二二七頁）には次の如くある。
「ユーモアの中でも諷刺・皮肉・パロディといったたいものものは、読者にもある程度のレベルを要求する」。
- 二二 例えば、『世間胸算用』（巻四の二）を踏まえて、△小悪▽左平次の様子をこう記す。「とらげば、呼で来てやるけはしき時も茶づけを喰すにはゆかぬもの也。念比あいの死たるとき。棺桶あつらへに行迄利をとるとは近比死がな目くじろの男」（巻一の二）。
- 二三 拙稿「やつし」放——都の錦の蹠蹴——」（緑岡詞林）（第一号）にその一部を示した。
- 二四 たとえば、一風は自分の教養について次の如く記す。
。「文字かんなのあやまりも。見ん人の笑草、あきれ草の種にまき散しける」『新色五巻書』（序）。
- 二五 「文盲第一田夫野人の生付、いろは仮名より外見ぬ者」『御前義経記』（序）。
- 二六 「八文字屋蔵板目録」（たとえば、寛保二年『刈萱二面鏡』に付載のもの）には、二書を「合六冊」として、「戌ノ年出シ」と下部に記してある。

○ 本稿は一九八〇年十一月五日、日本近世文学会秋季大会（於愛媛大学）の席上、口頭発表したものを骨子としている。